



馬 耳 東 風

「卯の花の におう垣根に ほととぎす 早も来啼きて……」と里の春を潤した菜の花や桜の季節を過ぎると間もなく夏が近づいて来る。今年是一年賀状や縁起のマスコットにウサギが活躍した卯年で、しかも陰暦4月の異称は卯月である。植物の卯に由来し、なんと卯にかかわりが深いことか、ウツギの名よりウノハナ（卯の花）の名で古くから親しまれて来た歴史があり、卯月に咲くからウノハナか、ウノハナが咲くから卯月といったのか、古人はこのような単調な芳香の無い花によくも目をつけたものだ。ウツギは万葉集にも載る株立状の落葉灌木で分枝して繁密で、しかも幹枝とも中心は空虚なのが面白い。古い幹枝を剪定するとよく分かり、初めてだとビックリすること請け合いだ。これが空木すなわちウツギの語源だと聞いた。産地は全国的で向陽の地を好み土性は選ばないそうだ。

さて、戦後日本のあちこちで近代的な国土調査で地籍・土地分類・水調査が行われ、筆毎に境界や面積が再確定され、境界杭が打ち込まれた。種類もいろいろあるようでコンクリート製やプラスチック製が多いように見うける。都市部では合理的で金属プレートや金属鋏をよく見かける。古来の知恵であろうか、以前は多くの場所でウツギが境界樹として用いられてきた。古くは、江戸時代の検地や明治の地租改正で大いに役立ったことだろう。おまけに木工職人が硬く腐りにくいので、このウツギの幹から木の釘を作り出したという。また、神事で齋

火の火鑊り杵にも用いると聞いた。

ウツギは万葉以来、生垣用として配植されてきたが、ブロック塀やフェンスに押されて数を減らしてきた。畑地の境界樹として今も少ないながら元気に息づいている様子は、トラクターの時代にあって境界を確認しやすく、コンクリート杭からロータリーの歯を守っている。生長が早く樹性強健で、しかも萌芽力が強いので剪定を強度に行わないと枝が伸びすぎ、いささか仕事の邪魔になる。ところが元気旺盛で病害虫を見たことがない。春の花々が一段落し立夏を過ぎる頃、枝に白色の5萼5弁のおとなしい野の花を見せてくれる。都市部では昨今、公園や街路の植栽で見かけることが多くなった。

東京近郊の武蔵野台地の農地は畑作が主体だ。河川にほど遠く、水利は用水に頼り、水田は古くから拓けず雑木林が目立つ。ここで後継者が誕生し、この機会に規模拡大し畜舎を新築した。家畜の飼育には水が絶対に必要である。場所柄、水道の便がなくやむなく鑿井に頼ったが幸い水脈を掘り当てた。都市近郊の家畜の飼育環境は厳しい。畑の真ん中の畜舎のどちらを見ても人家は遠く畑仕事の人影もまばらである。立夏も過ぎた往診の折、井戸端で器具を片付けながらふと眼をやると、近くの境界樹にウツギの花を見つけた。剪定残しの枝に目立たない白花をいくつかつけていた。

突然、近くの林から「キョッキョッキョッキョッキョ」(特許許可局)とはずんだ鳥の声が聞こえてきた。おお、まさに夏は来ぬ。

(柏)